日本性科学会ニュース

第29巻第3号　　平成22年（2010年）9月

発行人：大川　玲子　印刷所：㈱ 絢 文 社

第30回日本性科学学会 / 日本性科学連合 第12回性科学セミナーのご案内

会　場：倉敷市芸文館　アイシアター
〒710-0046　岡山県倉敷市中央1丁目18－1　TEL：086－434－0400
JR 倉敷駅南口より徒歩で約15分，タクシーで約5分
JR 岡山駅から倉敷駅まで約17分（山陽本線または伯備線）

参加費：性科学セミナー　3,000円（学生1,000円）　性科学学会　5,000円（学生1,000円）
性科学セミナー＋性科学学会（2日間）　7,000円（学生2,000円）

合同懇親会（美術館ツアー・パーティー）：2010年10月16日（土）性科学セミナー終了後
大原美術館（本館1F）〒710-8575 岡山県倉敷市中央1－1－15
懇親会参加費：5,000円

2010年10月16日（土）13:00 ～ 17:30　第12回性科学セミナー

テーマ：WAS の『性の健康宣言』と日本の現状と課題

講演1　PDE5阻害剤時代における男性性機能障害の治療
岡山大学医歯薬学総合研究科泌尿器病態学　石井　和史

講演2　カウンセリングルーム30年／これまでの結果から見えること　日本性科学会カウンセリング室　渡辺　景子

講演3　性の健康と性感染症／電話相談事業から　㈶性の健康医学財団　松田　静治

講演4　クラミジア，淋菌感染症／特に咽頭感染について　川崎医大附属川崎病院産婦人科　藤原　道久

講演5　コミュニケーション・メディアと若者の性　山口大学人文学部人文社会学科社会学講座　高橋　征仁

講演6　デート DV の現状とその予防教育について　ウイメンズクリニックかみむら　福原　博子

講演7　若年受診者からみえる性教育への提言　河野産婦人科クリニック　河野美代子

まとめ　アジア・オセアニアの一員として，性の健康を推進する WAS ミレニアム宣言を共有する
第12回アジア・オセアニア性科学学会会長　国立病院機構千葉医療センター産婦人科　大川　玲子

2010年10月17日（日）9:00 ～ 17:00　第30回日本性科学学会

会　長：永井　敦　川崎医科大学泌尿器科教授

テーマ：「男と女～性を科学する～」

特別講演「日常診療で出会う HIV 感染症 / エイズの現状」　川崎医科大学血液内科学教授　和田　秀穂

特別講演「ナンパを科学する～ヒトのふたつの性戦略～」
東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任助教　坂口　菊恵

会長講演「明快　男性医学」

シンポジウム「がんと性：性科学的観点からのアプローチ」

1. 男性性機能　昭和大学藤が丘病院泌尿器科准教授　佐々木春明
2. 女性の性機能の基本的な話題　国立病院機構千葉医療センター産婦人科外来管理部長　大川　玲子
3. 泌尿器科癌と男性性機能　川崎医科大学泌尿器科講師　常　義政
4. 生殖補助技術の現状と社会的取り組み　岡山二人クリニック院長　林　伸旨
5. 医療従事者による性相談・情報提供　九州がんセンター乳腺科副看護師長・乳がん看護認定看護師　小野　菊世

一般演題

第30回日本性科学学会事務局：〒701-0192　岡山県倉敷市松島577　川崎医科大学泌尿器科学教室
担当：医局長　常　義政（じょう よしまさ），研究補助員　檜垣 春恵（ひがき はるえ）
TEL：086-462-1111　FAX：086-463-4747
E-Mail：urology@med.kawasaki-m.ac.jp
ホームページ：http://www.med-gakkai.org/jsss30/

Vol. 29　No. 3

日本性科学会
〒107-0062　東京都港区南青山１－１－１　新青山ビル西館３Ｆ
長谷クリニック内
TEL　03 (3475) 1780　FAX　03 (3475) 1789

〔症例研究会から〕

治療意欲のある性犯罪加害者との心理療法

東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会　　石　丸　径一郎

私は精神科クリニックにおいて，性犯罪加害または性的問題行動を止めたいという主訴の患者の心理療法を，臨床心理士としてこれまで10例以上担当している。個々の具体的なケースについては触れないが，心理療法の経験から得たことを，本稿で紹介する。

アメリカ精神医学会によるDSM-IV-TR（精神障害の診断と統計の手引き）の「性嗜好異常Paraphilias」では，さまざまな性的嗜好のバリエーションが挙げられている。性嗜好障害は，臨床的な著しい苦痛，または社会的，職業的，他の重要な領域における機能障害を引き起こしている時に診断することになっている。しかしその中でも，暴力･虐待にあたる「小児性愛」「窃視症」「露出症」「窃触症」と，同意のない「性的サディズム」については，前記の条件に当てはまらなくても，実際に行動に移している場合には，診断をつける。性犯罪という視点から見た場合，強い治療意欲を持って医療機関・相談機関に現れる人は，加害者全体の中ではごく少数であろうと想像される。しかし性犯罪の再犯を減らすことで被害者を減らすためには，加害者への心理療法は非常に重要である。また，性犯罪加害者に対しては世間の理解や共感はほとんどなく，本人やその家族の人生にとっては非常に深刻な問題になる。

患者の特徴については，私の自験例では20～50代で全員が男性であった。既に何度も逮捕され，もはや自力では止めることができないのではないかと，医療機関を訪れる，または紹介されてくる者が多い。治療意欲の高さとも関係があるかもしれないが，高学歴でそれなりに地位の高い職業に就いていた者が多い。複数回の逮捕によって，職を失い，本人の人生や，家族関係が危機に陥っている者も目立った。考えられる原因･きっかけはバラエティに富み，単純な統一的理解は困難である。抑えられない程の強い性欲，性嗜好ももちろんあったが，それがはっきりしない者もいた。他の関連要因として，ストレス，ストレスからの開放，倫理観の低さ，共感性の低さ，躁気分，知的障害，飲酒なども考えられる。明確な女性への憎悪は，自験例では見られなかった。治療介入は，さまざまな方法を使って問題行動に歯止めをかけ，再犯の可能性を減らすことを目標とした。もっとも使いやすいのは，逮捕の際の衝撃と，家族や職場に迷惑をかけた記憶を薄れさせないことである。家族の写真，事件当時の思い出の品などを身につけたり，毎日見たりすることは有効のようである。苦手な者が多いが，被害者のショックや辛さへの共感を育てることも必要である。

症例研究会の中では，犯罪としてだけでなく，病気・精神疾患として理解し，完治は難しいとしても，再発を防ぎながら生活していけるように長期的に通院を続けてもらうことが重要である等の意見が出た。

援助交際や性風俗の利用についての男性側からの相談も時々あるが，年齢等の条件によっては犯罪にならない場合もあり，目標設定の判断に迷うことがある。性の健康世界学会モントリオール宣言の1.の「性の権利」を保護しつつも，3.の性暴力・性的虐待を排除することを目指すのが基本であると考えている。

〔会員のページ〕

女性性機能障害の治療薬がなぜ米国で認可されないのか？

横浜元町女性医療クリニックLUNA　関　口　由　紀

3年前にISSWSH（国際女性性機能学会）に行った時に，女性性機能障害のうち性的意欲障害へのテストステロン投与に関する大規模なランダマイズコントロールスタディーが行われており，よい結果になりそうなので，このスタディーが終わったらFDA（アメリカ食品医薬局）の認可が下りるだろうと言われていた。しかし結局いまだ認可が下りず，今年初めのISSWSHでは，女性の性的意欲障害に対するテストステロン補充は，今後もずっとオフラベルの治療になるであろうという雰囲気であった。そのかわりフリバンセリンという，抗うつ剤の創薬過程でたまたま見つかった，性的意欲障害の改善が認められるとされる薬が，今年中にFDAに認可されそうな雰囲気であった。しかしこれも今年の春は見送られたそうである。米国は，女性性機能障害の薬物療法に関しては，ヨーロッパより常に後進している。

日産のゴーン氏の本によれば，ヨーロッパは，いくらEUで一つになったといっても，各国で違うマーケティングを行う必要がある。つまり例えばイタリアとフランスでは，違う宣伝方法を考えなければならない。しかし米国は，国内であればどこでも同じマーケティングでビジネスができるので，世界で最も市場として重要なのだそうだ。それで世界中の企業が，まず米国への進出をねらう。薬剤に関しては，日本のようなファジーな認可体制ではなく，FDAでの認可の過程が明らかにされており，その過程をしっかり踏襲すれば，有効な薬であればどんな種類の薬でも，いずれは認可されると薬剤メーカー関係者が言っていた。市場性と認可の透明性と理由で，薬剤メーカーも，まずアメリカで薬剤を売り始める。しかし女性性機能障害の治療薬に関しては，そうはいかないらしい。

私は，米国で女性性機能障害の薬が認可されないのは，ブッシュ共和党政権が，キリスト教原理主義の下，セックス関係の医療製品の認可をしぶっているからだろうと思っていた。しかしオバマ民主党政権になっても事態は変わらず，かえってFDAの認可は厳しくなっているようである。例えばアメリカのベンチャーが作った腟の緩みを治療して女性の性機能を改善する高周波器械の臨床治験をLUNAで来年行う予定なのだが，日本にあるLUNAに臨床検討がまわってきた背景には，米国では認可を取得するめどがたたないという理由があるらしい。

米国は，日本人が考えているよりずっとキリスト教の影響が強い国だそうである。アメリカの政治的指導層の深層心理には，共和党であっても民主党であっても，このキリスト教が横たわっていて，女性性機能障害がよくなると，女性にセックス依存症がはびこってしまい，社会の害になるというようなネガティブな意識があるのだろうか？

ところでアメリカにおけるキリスト教の影響の1つに，婚外セックスに対するバッシングの大きさがある。英語のうまい友人が，アメリカの有名な教授に，懇親会で突撃取材を試みた情報によれば，アメリカの女性性機能障害診療の進歩の原動力は，エグゼクティブクラス男性の性欲だとのことである。アメリカのエグゼクティブクラスの男性は，お金はある。しかしそのお金で婚外セックスをすることは，エグゼクティブであればあるほどできないそうである。そのためエグゼクティブ男性がセックスしたくて，そのパートナーがセックスしたくない場合は，なんとかしてパートナーに再びセックスしたくなってもらうしかない。そのためには，少々高額な治療費も，喜んで支払うため，アメリカにおける高額な女性性機能障害医療がなりたっているのだそうだ。そしてエグゼクティブのパートナーが通うプライベートクリニックは，前述のテストステロンなどのオフラベルの治療が，積極的に行われている。前述の女性性機能障害の治療薬の認可のされにくさと，女性性機能障害のプライベートクリニックの隆盛は，米国における皮肉な対比となっている。

しかしそんな米国社会も，能力がありその結果お金も充分あるスーパーエクゼクティブ男性の婚外セックスには寛容である。彼らはセックス依存症という病気として治療していると言い訳するか，離婚と結婚を繰り返すという方法で問題を解決する。タイガー・ウッズやジャック・ウェルチがその代表例である。つまり古今東西，文化的な制約がどうであっても男性に関しては“英雄色を好む”ことが認められているのである。一方女性に関しては，どうだろうか。クレオパトラには，生涯で4～5名のセックスパートナーがいたようである。しかし彼女の場合誰もが認める美女で，さらに政治的に男性を利用して生きていく必要があった。女性の場合エグゼクティブであっても，政治的に男性を利用する必要がないと，一生涯のセックスパートナーの数は少なくなる傾向があるようだ。例えば即天武后は，唐の政権を完全に把握したが，性生活に関しては，どうやら皇帝と皇帝が亡くなったあとただ1名の愛人がいただけのようである。“性生活の充実”が，パートナーの数や，性交回数だけでは単純に測れないところが，女性性機能障害の診療の難しいところである。

第39回性治療研修会の報告

日本性科学会幹事　大　谷　眞千子

平成22年5月30日（日）に実施した第39回性治療研修会についてご報告します。

本年度の参加者数は，役員を含め76名で，アンケートにお答えいただいたのは35名（会員29名，一般4名，無回答2名）です。以下，アンケート結果の概要をご報告します。

✓　アンケートにお答えいただいた方の職種の内訳は表1のとおりです。

表1.　Q：あたなの職種は？（数値は実員数，n=35）

	医 師	臨床心理士	看護職	教育・研究	その他	無回答	合 計
合 計	15	3	6	3	7	1	35

✓　講演に対する評価の一部を表2に示します。

4つの講演・演習すべてに高い関心をお持ちで，表に示すように「女性の性反応・性機能障害」，「カウンセリング演習」は，「役立つ」との評価が特に高い結果でした。

表2.　Q：それぞれの講演は役立ちましたか？（n=35）

講　　演	は い	ややはい	どちらともいえない	ややいいえ	いいえ	無回答	合 計
女性の性反応・性機能障害	74.3%	14.3%	2.9%	0%	0%	8.6%	100%
ED 診療におけるトピックス	45.7%	34.3%	0%	8.6%	2.9%	8.6%	100%
配偶子ならびに性腺組織凍結保存の臨床適用に関する最新の知見	51.4%	22.9%	14.3%	0%	0%	11.4%	100%
カウンセリング演習 性治療カウンセリングの基本	65.7%	22.9%	0%	0%	2.9%	8.6%	100%

✓　今後取り上げてほしいテーマについては，以下のようなご要望がありました。

「発達障害や人格障害を有する方への性治療の実際」，「性機能の発育発達とそれを阻害する要因」，「セックスレス」，「GIDのホルモン療法について」，「周産期（妊娠・産褥期）における性」，「性犯罪と精神疾患，性犯罪者の社会復帰の条件」，「がん患者（器質性の障害）の性機能障害」，「一般臨床現場での性の問題と対処」，「実際のカウンセリングの場面を見てみたい」など。

今後とも皆様からのご意見，ご要望を活かして研修会を発展させたいと考えております。アンケートにご協力いただいた皆様に，心よりお礼申し上げます。

日本性科学会会員の皆様へ

聖隷浜松病院泌尿器科　今　井　　伸

この度，平成22年7月の幹事会で新幹事の任を授かりました聖隷浜松病院泌尿器科の今井　伸です。会員歴8年，アラフォーの私が，このような大役を仰せつかり，いささか恐縮いたしております。

私は，NHK朝の連続ドラマ「ゲゲゲの女房」の原作者　武良布枝さんと同郷の島根県安来市の出身で，島根県立安来高校から島根医科大学に進学いたしました。平成9年3月に島根医科大学を卒業し，同大学の泌尿器科に入局いたしました。

泌尿器科に入局したきっかけは，学生時代の親友の勃起障害の悩み相談に応じたことから始まります。マスターベーションは毎日でもできて勃起も正常なのに，彼女といざというときになると，全く勃起しない。そんな彼の悩みに5～6年付き合い，いろいろな解決策を考えました。勃起障害（ED）に悩んでいる男性を救うのが自分の使命である。そんなことを考えて，泌尿器科を選択しました。

2年の研修医生活を経て，3年目の5月から勤務先の病院で部長の協力を得てED外来を開設いたしました。折しもバイアグラが勃起障害治療薬として処方可能となったばかりであり，多数の症例を経験することができました。そんな中で，私の親友のような症例は，バイアグラが効かないことが多いということに気付きました。結婚しても性生活を開始できない，新婚の症例の割合が多いことから大きな責任を感じました。心因性のEDであり，心理療法やカウンセリングの重要性を痛感したため，平成14年8月に本学会に入会いたしました。

その後も，一般泌尿器科診療を行う傍ら，性機能障害，男性不妊症の診療に力を入れてまいりました。日本人の気質として，性機能障害に悩む方の多くが誰にも相談できず，一人で悩んでいるものと思われます。一人でも多くの方が性機能障害の悩みから解放されることのお力になれるよう，性科学会員としてがんばっていきたいと思っています。日本性科学会会員の皆様，今後ともご指導ご鞭撻の程，宜しくお願い申し上げます。